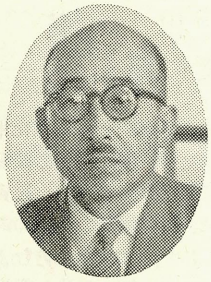
西南学院大学
図書館報

第25号
昭和39年7月1日発行
発行所　福岡市西新町798 電㊷0031
西南学院大学図書館
発行人　山下和夫



経済学部の発足と図書館への期待

経済学部長　八田　薫

この4月から漸く経済学部が増設されて、本学は文・商・経の三学部から構成されることになり、新しい校舎も竣工し、学生数も増加して、この頃の週日における学園は大変賑やかになった。私が初めに『漸く』と言ったのは、この経済学部の増設は数年前から準備されていたからである。即ち、昭和34年4月から商学部商学科の中に「商学・経営学コース」と「経済学コース」の二つのコースが設けられた。これは将来経済学部増設のための最初の準備段階であった。その後、昭和37年4月から「経済学コース」が「経済学科」となり、従って商学部が商学科と経済学科の二学科から構成されることになったのである。そして今年4月、経済学部の発足となったわけであるから、今までに5年間の準備期間、言わば生みの苦しみを経て今日に至ったことに留意して貰いたい。

また、私は「この頃の学園」が「大変賑やか」になったと言ったが、このことは喜ばしいことだろうか、悲しいことだろうか。

大学の本来の任務は教育と研究にあると言われる。しかし、大学に学ぶ学生は一日の大部分を学園内で過ごすのである。言わば、学生の生活の場所でもある。従って、学生が生活をエンジョイするための施設や場所が与えられねばならない。学園内にサークル活動のために、学修のために、また、学生間の交わりのために、適当な施設と場所が要求されるのは当然であろう。

ところで、大学図書館は、学生の学修活動のための最も重要な施設の一つである。多くの学生は授業なき時間または放課後、図書館を利用する。図書館はいろいろな目的のために利用される。講義の予習復習のために、リポート作成のために、教科書以外の参考書を読むために、単なる読書欲満足のために、等々。

しかし、最近、図書館の閲覧室をのぞいて見ても、学生数の増えた割合に閲覧室に居る学生がそれ程多くない。現在、本学図書館は蔵書数が増えて、書庫が狭くなり、増築の必要に迫られていると聞いているが、私は、むしろ、閲覧室が狭くて増築の必要がある程、学生の利用者の多くなることを望みたい。現在、九州地区で経済学部を持っている大学は国立では九大、長崎大、大分大、私大では福大、鹿児島経大の五つであるが、蔵書数においても他の大学に劣らないものにして頂きたいと思う。

（昭和39年6月13日）

本号の主要記事

1面　○　経済学部の発足と図書館への期待
　　○　告知板
2面　○　経済学部学生への読書案内（特集）
3面　○　学院図書館回顧録
4面　○　図書館見学記　　○　38年度利用統計表
　　○　図書寄贈者

告知板

○　**夏休中の開館について**　休暇中は原則として次のとおり開館します。

月曜 ― ~~金曜~~　8.30～17.00
~~土曜~~　~~8.30～19.00~~

なお、8月下旬に修養会のため2日間閉館する予定です。

○　**夏休長期貸出**　7月1日（水）から長期貸出を行ないます。冊数は2冊まで、期限は9月11日（金）までです。

○　**卒論特別貸出実施中**　4年次生で卒論作成中の人には、3冊1カ月間の特別貸出が認められます。ゼミ担当教授の証明が必要です。希望者は係まで。

○　**リザーブド・シェルフの設置予定**　この夏休みに受付・貸出カウンターの隣りにリザーブド・シェルフを設けて、利用の便を図りたいと思っています。ご期待下さい。

経済学部学生への案内

特集

なにを読むべきか

平岡規正
横溝軌一
遠山馨

各教授に聞く

■ 経済史

われわれが歴史の勉強をしなければならないのは、歴史研究に少くとも二つの意義があるからである。第一は、われわれがどんな時代と社会に生きているか、第二に、われわれ人類はどのように生きてきたか、ということを知ることができるからである。人類は宇宙の歴史のある時期に生れ、そしてわれわれは人類史の一時期に生きているのである。したがってこれらのことを明らかにする歴史研究は、われわれの世界観や人生観を構成する上に不可欠の重要な学問であるといえる。これらの諸問題についての正しい認識をもたなくては、いかに生きてゆくかを正しく考えることはできないであろう。経済史学は、人類史の経済的側面を明らかにする学問であるが、窮局的には以上の諸問題につながるものと考えなければならない。このことを念頭に置いて、次の本を読むことをすすめたい。

F.エンゲルス著『家族、私有財産と国家の起原』（新潮社、マル・エン選集第9巻）『空想より科学への社会主義の発展』（同第12巻）、M.ウェーヴァー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）、R.H.トーニー著『宗教と資本主義の興隆』（岩波文庫）、J.U.ネフ著『工業文明の誕生と現代世界』（未来社）。

教科書や入門書は勉強のための補助手段であって、個性がないのが普通である。必要ではあるが、そこに足踏みしていては、本当の学問の価値に触れることなく、一生を終ることになろう。春秋に富む若人は、高い目標をもって勉強すべきである。　（遠山馨助教授）

■ 経済政策

6月13日に、アメリカにいられる著名な経済政策学者であるボールディング教授を招いて、本学で「軍縮と世界経済」という題目の下に講演会が行なわれた。その中で、興味ふかかった点は、現在500億ドルに上るアメリカの軍事費が削減されるならば、それはアメリカの経済の発展に著しい貢献をするであろうが、軍需産業の平和産業への転換は技術的、あるいは経済的にはむずかしくはないが、政治的には、もともと軍備が国際的に相対的なものであり、政治的決定に従わねばならぬ性格のものである以上、困難な問題がのこされているという点にあった。ボールディング教授の所説は、経済に重要な影響を与える軍備が政治という別な次元において決定される点に本学での研究会においてはしばられたが、単に軍備の問題のみでなく、生産物の分配にしても（賃金の決定）、投資の決定にしても（投資誘因は何か）、単に経済の次元のみからではとらえ難い問題を含んでおり、ますます含むようになるであろうと考えられる。経済政策は政治と経済との接点であり、それは、さらに根本的には、道徳（例えば分配の正義とは何か）の問題であり、窮局には宗教につらなる問題であるであろう。単なる「存在」の分析（例えば池田内閣の成長の分析）からのみでは、それに対する自己の態度の決定は生まれてこない。

そこで政策論においては、多元的な読書、即ち宗教、道徳、政治、経済についての理解が必要であり、そして始めて現実の政策の理解と同時に批判が可能であると考える。　（横溝軌一教授）

■ 経済学

燃える氷壁——温かい心情と冷たい頭脳——

I　温かい——時には烈しい——心情

(1) 濁流だ　濁流だ　と叫び流れ行く
　末は泥土か　夜明けを知らぬ

(2) 額の真中に　弾（タマ）を受けたるおもかげの
　起ち居につきて　夏のおどろや

(3) 暴力のかく美しき世に住みて
　ひねもす歌う　我が子守歌

以上三首　斉藤　史

1936年すなわち昭和11年には、私にとって忘れることの出来ない二つの革命がくわだてられた。所期の目的を達し得ず首謀者が「銃殺」された「錦旗革命」と、経済学に新しい時代を作った「ケインズ革命」である。自分で作った米さえ食べることが出来ず、娘をも売らなければ生きることが不可能な人達や潜在失業者でみちあふれた農村の疲弊に血潮をわかして決起した青年将校によって「錦旗革命」は行われたが、「叛乱」という汚名をつけられて失敗した。当時中学4年生で、受験勉強にあいて河上肇博士の「貧乏物語」や「経済学大綱」をむさぼり読んでいた私は、その手段を批判はしていても、青年将校のひたむきな心情は懦夫の私をさえふるい立たせ、貧乏追放の学としての経済学を勉強する決心をさせた。冒頭の三首は、「銃殺」された青年将校　（次頁下段へ）

学院図書館回顧録

―― その8 ――

船越栄一

私が学院の図書館長をつとめたのは、昭和33年の1月から34年の12月までの2カ年間であるが、この間に、私がしたこととしていえば、大学図書館への移管の準備を完了したことと、文部省の私大設備助成金の申請をはじめたことであろうか。

図書館も昭和33・4年頃までは、中学・高校をも含むいわゆる学院図書館時代であった。当時は大学の定員も今にくらべれば、その何分の一かに過ぎなかったが、それでも試験時になると補助椅子を入れねばならなかったし、それに中・高校生と一緒では管理も大変であったので、大学の専用図書館にすべきことを考えて、館長就任後、間もなく、この準備にかかったが、従来の伝統もあり、利害の相反もあって、相当な抵抗があった。そこで、科学的な数字を示して、個別的に関係者を説き、ついに運営協議会の議題とすることに成功して、中・高の校長の大体の了解をとりつけ、さらに、図書館委員会を招集して、中・高の委員の承認をうるなど、相当の苦労をしたが、とにかく、大学移管の準備を完了して、次期の館長にバトン・タッチできたのは大きな喜びであった。

私大設備助成金の申請については、西南学院の伝統として、国家の補助は一切受けないという鉄則に近いものがあったが―― これは過去のにがい経験からきているものであって、その趣旨は充分尊重しなければならないとは思ったが、戦後の民主主義の時代にあっては、思いきって国家の援助を受けてはと考えて、この申請にふみきった。以後、この制度を利用して、学院も可なり図書その他の施設の整備をみることができ、これが、この度の大学経済学部の新設にあたって、大きな助けとなったことも見逃せない。

先生方の研究施設の拡充のためにと思い、マイクロ撮影機設置の長期計画を立案して、初年度予算として50万円を積立てることができたが、この方針は受継がれず、これはその後、施設費の一部に流用されたようである。学生諸君の研究の便宜のためには、英文閲覧室を商学閲覧室並にテーブル・椅子を整備して、居心持のよいものにした。そのためには可なりの予算を必要とした。私の館長時代には私大設備助成金の申請といい、マイクロ影影機の準備基金といい、閲覧室の改装といい、多額の特別予算を学校当局にお願いしなければならないことが多かったが、当局がこれに対し、よき理解を示されたことを今もって感謝している。

僅か2カ年間の館長ではあったけれども、この期間に私が得たものは大きい。私などは館長としては、当時、最も若い方の一人であったが、古い私大の館長には学長級の方々も多く―― 慶応大学の塾長高村象平氏は私と一緒に館長に就任した方である。――その方々との接触を通じて、私大図書館のあり方のみならず、私大の経営についての多くの知識を与えられた。私の学校経営に関する知識はこの期間に学んだものが多い。

最後に、館員の方々に対しては、当時は、私もまだ若かったし、相当にきびしい館長ではなかったかと思う。それにもかかわらず、不平もいわずによく協力して下さって、感謝にたえない。時々、一緒に出掛けたピクニックの写真をとり出しては当時を追想している。(39.5.30)

(商学部長)

(前頁下段より)　の幼時からの友達であった斉藤史が、その当時作った短歌である。

Ⅱ　冷たい頭脳　Aimez donc la raison!

「私たちの問題を暗示するのは心情のつとめであり、それを解決するのは知性のつとめである。」とコントは言った。「錦旗革命」は失敗したが、慢性失業を解決するための新しい、より一般的な理論を1936年に世に問うたケインズがひきおこした「ケインズ革命」はその冷静な知性の故に成功している。

ケインズの「一般理論」を理解するための必読書として　(1)ディラード著岡本訳「J.M.ケインズの経済学」(2)　ハンセン著大石泰彦訳「ケインズ経済学入門」(3)　新野幸次郎・置塩信雄著「ケインズ経済学」をあげておく。巨視的経済学の本としては　(4)　宮沢健一著「巨視経済学」　(5)塩野谷九十九著「近代経済学」、微視的経済学の本としては　(6)伊藤久秋著「価格論」　(7)ヘンダースン・クォント著小宮隆太郎訳「現代経済学」をすすめる。

近代経済学の入門書としては、(8)千種義人著「経済学入門」がよい。経済学は応用数学ではないが、経済学者はおしみなく数学をつかう。数学の本としては、培風館発行の新数学シリーズの　(9)「経済学のための線型数学」(10)「行列および行列式」(11)「差分方程式」は便利である。

微分積分については、高校の数Ⅱ、数Ⅲを復習すればよい。

何のために経済学を勉強しているか、時々その目的を忘れて、数学に魅了された時、私はマルクス経済学の本をよむことにしている。

マルクス経済学の本については、他に解説者がいるので擱筆しよう。

(平岡規正教授)

奉仕係より

○ 昭和38年度1年間の入館者数と館外貸出図書冊数（いずれも学生のみ）の統計表を前年度と比較して見ました(右表)。まず入館者ですが、毎年約7～8千名の割で増加しています。これは学生数の増加が最大の原因でしょうが、利用者の増加とともにだんだん閲覧室が狭くなりつつある感じです。ことに試験期の9月は1日平均640名にも達しています。
館外貸出図書の冊数も同様に順調な伸びを示していることが分ります。

○ 最近、閲覧済みの図書を机の上に放置したまま退館する人があります。必ず、出入口のそばの棚の上に返却してください。

▶ 昭和38年度入館者数(学生)

学科別	前年度	昭和38年度
大学神学科	23	7
〃 英文学科	18,969	23,438
〃 商学科	52,681	29,528
〃 経済学科		25,580
短大 児教科	216	207
その他	34	135
計	71,923	78,895

▶ 昭和38年度館外貸出図書冊数（学生）

分類別	前年度	昭和38年度
0 総記	133	153
1 哲学・宗教	2,045	2,696
2 歴史	409	373
3 社会科学	5,803	6,325
4 自然科学	409	421
5 工学	121	152
6 産業	1,553	1,950
7 芸術	626	724
8 語学	424	570
9 文学	5,261	4,878
雑誌	514	621
計	17,297	18,863

図書館見学 (1)

東京大学附属図書館

私立大学図書館協会の総会出席のついでに東大図書館を見学した。地上六階地下一階の建物は堂々たるものであったが、私の興味は昭和36年以降3カ年計画で実施された近代化にあった。その要点を一枚半に書いて見る。

東大図書館内には年に一度も使わないような貴賓室があった。それが今は自由閲覧室となっていた。ひろびろとした部屋で読書しているものあり、＊瞑想しているものあり、行儀悪くソファに仮眠しているものあり、＊まずは90%以上利用されていた。

次ぎに、センターができたこと。アジア資料センター、外国法文献センター、プレスセンター、それに語学ラボ。ただし、ラボはまだ利用されていないようであった。機械はソーニー。附属研究室は狭いがよくできていた。

そのほか、参考室、複写設備、閲覧個室、閲覧個席、ビュフェ、館内改装にあたり隔壁が随分できているが、それがガラス張りになっていることなど、いろいろ興味をもって見て廻ったが、一番印象を受けたことは開架制度が採用されていることであった。書庫はもちろんあるが、書庫内にもキャレルが設けられて、大学院学生、その他特に許可を受けたものは書庫内閲覧席を利用できるようになっていた。書庫の出入には所持品検査があるそうであるが、開架閲覧室は自由に出入できるようになっていることは実に素晴らしいことと思われた。震災後の薄汚い仮図書館を利用した私にとってはまさに隔世の感であった。

（館長　坂本重武）

図書寄贈者

◆ 大塚万里 (67-197)

日本文学講座	16冊	改造社
短歌講座	全12巻	改造社
默阿弥全集	全20巻	春陽堂
有朋堂文庫	31冊	
他	124冊	

◆ 卒業記念寄贈

吉田健治	(64-438)	11冊
福田　隆	(64-107)	2冊
松村安泰	(64-609)	28冊
石川政明	(64-561)	1冊
松下　浩	(64-304)	15冊
畑中邦夫	(61-238)	1冊

編集後記

やっと夏休み前に間に合うことができて、ほっと一息です。山や海への案内がしきりと目につく時節ですが、休み中は図書館も殆ど毎日開いています。

図書館で充実した夏休みを！

（Y）